

④ 国際親善と慈善活動

石川歌奈子

一 はじめに

定例昼食会で初めて私に国際婦人会を紹介して下さったのは、隣家の奥様ベテイ・ライス夫人であった。若い頃の私は、この方から日常生活全般に渡り実に多くのことを教えて頂いた。ハンサムで背の高いご主人との間に、ケンという一人息子さんがあった。偶然我が家の息子も健と云い、お互いによき友達同士となり、自宅近くの高風保育園にライスさんの紹介で入園することとなった。以来園との御縁が続いている。あるとき園の調理器具が使用不能となり食事の仕度が出来なくなった。ライス夫人と二人で五〇人分の夕食を整えて運んだことも懐しい思い出である。気性がさっぱりしていて料理が上手なせいもあったが、ライス夫人は手間暇を物ともされなかった。子供が保育園に上れば月一度の国際婦人会への出席は出来るはずだというライス夫人のお勧めで、入会してから早くも一五年

になる。私には観光通訳の経験があったため、入会翌年には定例昼食会の予約係をさせて頂き、委員として会の運営も理解するようになった。この役を受けるに当って前任の山永夫人からお手紙による懇切丁寧な御指導との励ましを頂いたことはそのお手紙と共に私の大事にしている思い出である。以来私も後任に仕事を引き継ぐ時これに見習っている。ライス夫人はご主人の引退で帰国されたが、山永夫人はフェリス女学院の英語講師として現役であり、会の名誉会員としてお元気で活躍中である。幸い私は最高の先達二人に恵まれたことに感謝している。

二 会の概略

横浜国際婦人会 (YOKOHAMA INTL WOMEN'S CLUB 略して Y. I. W. C.) の存在は五〇数年に及ぶ歴史があるにもかかわらず、数年前まではあまり知られていなかった。従来の活動は着

実であったが外向的でなかったといえる。私達が内輪の活動を発展させ、更に外部に働きかけて徐々に実績を積み重ねて来たことにより、単なる婦人会から、今や地域に於て社会的意義を持つ団体として、自らの存在を誇りとするまでに成長したのだと思う。

会は一九二九年に県下の養護施設や老人ホームなど援助を必要とする人々を支える目的で O・F・モック夫人を初代会長に設立された。会の目的に賛同し英語を解す婦人は誰でも加入出来るという当初からの開かれた会の気風は昔も今も全く変りない。戦中戦後の混乱期に一時活動停止を余儀なくされ、その詳しい記録も失われているが、一九四八年十一月に活動を再開し、一九五〇年 A・スニーン夫人が会長であった時は会員約三〇名であった。それまでの茶会から昼食会となり会員数も倍増し、その頃県下の五二施設を物心両面から援助していたという。当時米軍人の夫人達が主力であった

- 一 はじめに
- 二 会の概略
- 三 会の活動
- 四 会員相互の交流と今後の課題

が少数の会員が力を合わせて物資の不足した貧しい日本の施設のためにいかに尽力し、また相応に感謝されたかは想像に難くない。現在の会員数は準会員も含み約二〇〇名であるが日本人の入会希望者が年々増える傾向にあるため、一国の会員数が全体の半数を越えてはならないという規則を作り更に準会員制度を採用して現状に対応している。国籍は二〇カ国、うち数の上から日本人が半数、次いで米・英・独の順になる。会員歴二〇年以上の名誉会員一三名中外国人が四名いる。職業を持つ会員もいるが大多数は専業主婦である。今日まで歴代会長は外国人が勤めてきた。四月は役員交代期で一九八五年度会長 T・ローデン夫人 (スウェーデン) から五月よりグレイス夫人 (アメリカ) に引き継がれる。

会の組織と運営は会則と付則の定めるところに従い、委員会の話し合いの下に行われる。外国人会員の滞在期間が比較的短期なので顔ぶれが年ごとに変ること

が多いが、基本的に会の方針は変ることなく次代に引き継がれていく。従来からの慣例により県知事夫人を名誉会長に戴き、会長一名、副会長三名、うち二名は

各々福祉と資金担当の委員長を兼任する。その下に、会計、記録、通信、会員、

プログラム、組織の正副委員長が実行委員として活動する。更に常任委員として

予約、広報、会報、趣味、旅行、接待、

装飾、宴会担当の正副委員長が各々の仕事を

する。会長の相談役も含め実行委員一八名、

常任委員一五名で会を運営している。日本人と外国人の割合は約四対六

である。月一回の委員会の議事及び議事録は全て英語である。従って便宜上記

録、会報係は英語を母国語とする者が担当する。毎年三月に役員の改選があり、

委員は五年以内続けることが許されるが同じ

役員は二年に限る。会長は会内外の全ての仕事

に関する大役のため、余程の家族の理解がある場合以外通常一年で交代

する。一般会員の出席する定例会は九月から翌五月まで、

月一回の昼食会で種々の講演などプログラムが英語で用意される。四月は

アゼリアティ、フアッシュンショー、十二月は

クリスマスパーティーが例会の代りにホテルで開かれる。六月から八月までは夏休み、その間に外国人の移動が多いので九月の定例会をもって新年度の始まりとしている。会報は英

文で月報である。

三——会の活動

・子供の園(茅ヶ崎市堤)

終戦直後から訪問を始め、日ノ出町に廃材で急造された建物の修理補修も手行った。その後消防法にかなわぬまで老朽

した建物に改善命令が出て、一九七一年現在地に土地を購入、一九七八年再建が

始まるまでその無謀とも思えた計画を実現させたきつかけを作り、国を始めとし

た公的機関を含めた米軍家族等あらゆる方面に呼びかけて建設資金作りを援助し

たいきさつがある。建築ローンの支払い援助、奨学金、幼稚園児の月謝、子供達

の下着購入など現在も出来る限り支援している。四歳一八歳まで約四〇名の子

供達が訪れる度に大きく育っていくのを見るのが楽しみである。毎年、帰国のため

に不用となった家具、家庭用品などが外国人会員から運び込まれ施設で重宝され

たり、或いは園のバザーの商品となる。

・高風子供園(中区本牧)

四歳から一八歳まで六〇名の子供達のために施設の建物補修の資金援助、ベッ

ドや寝具、勉強机の購入、洗濯機の寄附などを行ってきた。離婚、アルコール中毒、借金などで壊れた家庭の犠牲となつた子供達の里親となり家に招いたり、帰

国後もプレゼントや便りを寄せるなど家族で世話をする外国人会員もある。

・家庭学園(保土ヶ谷区)

現在国際婦人会だけが訪問を許されている少女の更生施設である。四七名の少女達と年一回のバレーボール大会を楽しみ、

クリスマス近くにはパーティーを開き歌を唄ったり手芸品と一緒に作って交流している。片言の英語に答えてくれる

外国人会員の来訪は楽しみに待たれている。

・白寿荘(旭区上白根)

一〇〇名余りの外出の機会を持たぬお年寄りにとって時折の訪問客は慰めとなる。クリスマスにはプレゼントと手作りの菓子類を携えて歌や踊り落語等の余興

を共に楽しむ。高風園の子供達と共に訪れることもある。ホームの敷物、カーテン

などの備品を購入したり、石けん、タオル等の必需品を届けている。慰問を続けて来たことにより五年前に会は横浜市

から表彰された。

施設の子供達一人ひとりに誕生日、入学、卒業を祝って会からカードを贈っている。お年寄りとの間にも心の養祖父母

縁組が結ばれ、カードや手紙が交わされている。復活祭やハロウィーンのパーティーを開いたり、時にはスケートや見学

に子供達を誘うこともある。子供達のために合同クリスマスパーティーが例年催

され、余興や会員手作りの食事のあと、サンタがプレゼントを手渡す。昨年、この後大きい子供達は外国人演劇グループによる英語劇に招待された。

・その他の援助

定った施設への援助の他にも、その時々必要に応じた援助も行なっている。身障者オリピックのため聖ミカエル学園

に寄附、外国人子弟の学資援助、目の不自由な外国少女のための眼鏡の購入援助、

アフリカ難民、インドシナ難民への寄附。(会員には国際難民救済グループ

の活動も合わせて熱心に行なっている者もあり、互いに協力関係にある。)シー

メンズミッションという外国船員を援助する機関への寄附、メキシコ、コロンビア

災害地への寄附などが過去四年間の主だったものである。

・福祉事業のための支出

近年会が支出した福祉事業のための金額をふりかえってみると次のようになる。

一九八二年—三、八二〇、二〇三円

一九八三年—三、八七二、八一〇円

一九八四年—四、一五七、六三四円

一九八五年—三、四一四、七八〇円

福祉活動は友好と並び国際婦人会の存在目的そのものである。この活動と資金作りは会員にとって重要な仕事であり、この点を良く理解して行動することが全

員に望まれている。

会費は通信事務費にあてられるので、活動資金は担当委員を中心に年間計画をたてて会員が協力して事業を行い集める主な事業には次のものがある。

・アゼリアティとファッシュンショー
伝統ある会の事業で最大の収益を上げるのが毎年四月のこの集いである。昨年三〇周年を迎え、ニナ・リッチ社の全面的協力を得て成功をおさめた。奨学金の資金作りの目的で始められたこの集いは、つつじの花の美しい五月の庭園で英国風のお茶を楽しむ行事であった。花と競う各国婦人の衣装も優雅であったろう。やがて時と共に会の規模も大きくなって現在のようにホテルを会場に、チャリティーの良き理解者である有名デザイナーの協力を得て立派なファッシュンショーを兼ねた茶会へと発展した。今年も英国王室とのゆかりも深いハーディー・エイミスのショーに期待を寄せている。

出席者は近年三〇〇名を上まわり、当日の「くじ引」の賞品も特賞の車以下航空券等豪華賞品が数多く用意されている。いずれも企業に協力を願って会員が足で集めて得たものである。準備に要する労力は相当なものであるが、このエネルギーの源は、自分達の活動が援助を求めている人々の幸せに確実に繋がるといふ会の信念に他ならない。先述の「くじ」は

一枚五〇〇円であるが、外国人会員と一緒にこれを買って気付いたことがある。彼女達は初対面の外国人に気軽に声をかけ、相手もあっさりとい、二枚買って双方「Good Luck」といって別れる。チャリティーの一言が通じるのである。相手が日本人となると逆にこの一言で敬遠されてしまう。欧米人はチャリティーを理解しない金持日本人に首を傾げる。

勤労感謝の日に山手の教会を会場にして催され、クリスマスの飾物、手芸品、自家製菓子類の販売を中心としたところに特色がある。夏休みに手芸品を作り、九月に入ると早々にバザー委員会が動き出す準備のため会員の家に定期的に集まり社交を兼ねて協同作業を行なう。各国のクリスマスのアイデアが持ち寄られ製品が作られるのも国際婦人会ならではのことである。「ホワイトエレファント」(白象)と呼ばれる家庭の不用品もここでは人気商品となる。地の利を得て観光客や若人達が気楽に立寄るようになったが、以前は遠くから物珍らしそうにのぞく人を呼び込んだのも懐かしい。売手は外国人と日本人と二人一組になると効果がる。

・クリスマス・ハウスツアー
米国では地域的に盛んだときが、日本では個人の家を解放して見せる例を余りきかない。それだけに外国人の住居と暮しぶりを拝見するのは興味を持たれ人気がある企画である。特にクリスマスの飾付は国や家によって異なり、見てまわるのは楽しい。去年で五回、例年各国の家々を五軒、四時間程解放してもらい、約二〇〇人が時間内に切符を見せて各々自由に見て廻る。そのうちの二軒でお茶の接待があり外部の人々に会の活動を理解して頂く良い機会となっている。外国人は日本家屋や庭に関心を持つので、山手、根岸近辺に協力者を探している。

・その他これまでに成功した企画
(ア)英語を話す国際文化セミナー(小人数で三カ月間、週一度毎回異なった外人家庭の主婦を囲んでお茶を飲みながら生活や文化について話し合う日本人向けの企画)
(イ)カジノ・ナイト、ラスベガス・ナイト(賞品を多数用意してビンゴその他のゲームを楽しむパーティー)
(ウ)カーニバル・イン・ヨコハマ(仮装ダンスパーティー)

(エ)会員宅で開かれるランチ・パーティー等。
また、一九七八年度は翌年の創立五十年をひかえて特に活気づいた年で、この時のアゼリアティはカナダ、オーストラリア大使夫人や、当時の外相夫人も出席され県民ホールで盛大に催された。

いくつかの新聞社も取材にきて写真入りで記事を載せた。これ以後「子供の園」の建設資金を作る目標が出来たため着々と事業の手を広げるようになり、再建援助に關して度々会の名が紙面に載るようになる。恒例の横浜市の開港記念パーティーに毎年役員全員が招かれ市長と言葉を交わす機会を持つている。以後一九八三年に引き続き一九八四年にも横浜市の婦人問題国際セミナーに参加を依頼され講師、討論会の司会、通訳等を団体で勧めた。姉妹都市セミナーの際の横浜港内周遊にも外国客のつきそいを承った。その他市の防災訓練や出初式に招待されたり、都市計画局主催「外国人住宅研究会」の講師も依頼された。また、市文化室には、「ジャコメッティ展」「アルプ展」に御案内頂いた。横浜市美術館完成の折には友の会のボランティア案内役に興味を持つ者も多いと思う。

当会主催の十一月のオリエンテーションは、来浜したばかりの外国人が早く生活に馴染むように日常案内や心理的不安を除く手伝いをする企画で、この為の資料に YOKOHAMA MY CITY を使っている。一九八三年発行された YOKO HAMA MEDICAL DIRECTORY の印刷費用も市に一部負担して頂いた。外国人が安心して診てもらえる医師の名簿を作成したのも会員の発案である。

一九七八年度は翌年の創立五十年をひかえて特に活気づいた年で、この時のアゼリアティはカナダ、オーストラリア大使夫人や、当時の外相夫人も出席され県民ホールで盛大に催された。

また、一九七八年度は翌年の創立五十年をひかえて特に活気づいた年で、この時のアゼリアティはカナダ、オーストラリア大使夫人や、当時の外相夫人も出席され県民ホールで盛大に催された。

また、一九七八年度は翌年の創立五十年をひかえて特に活気づいた年で、この時のアゼリアティはカナダ、オーストラリア大使夫人や、当時の外相夫人も出席され県民ホールで盛大に催された。

また、一九七八年度は翌年の創立五十年をひかえて特に活気づいた年で、この時のアゼリアティはカナダ、オーストラリア大使夫人や、当時の外相夫人も出席され県民ホールで盛大に催された。

また、一九七八年度は翌年の創立五十年をひかえて特に活気づいた年で、この時のアゼリアティはカナダ、オーストラリア大使夫人や、当時の外相夫人も出席され県民ホールで盛大に催された。

また、一九七八年度は翌年の創立五十年をひかえて特に活気づいた年で、この時のアゼリアティはカナダ、オーストラリア大使夫人や、当時の外相夫人も出席され県民ホールで盛大に催された。

このように市とY I W Cの取り組んでいる事業や問題に、互いに協力すると一層効果の上る面が多くあるのでこれから良い関係が続けていきたい。

四——会員相互の交流と今後の課題

現在、矢口台のY C A Cで行われている定例昼食会には一〇名前後が出席し親睦を図っている。各々名札をつけて席につき英語で交歓する。昼食会のテーブルでは日本人同志なるべく固らないようにして、名札を見てはお互いに交流を図っている。慣れないうちは日本人は皆同じように見えるらしく、同じことが外国人にもいえる。また、親しくなった頃には帰国ということが応々にしてある。毎月のプログラムも長く居る人達にとっても繰り返しにならない企画を用意せねばならず、講演や説明を英語ですることと相まって多くの人が楽しめる企画を探すのに苦労がある。英語の理解にも個人差があり問題があるが、一般に我々日本人は上手に話せないという意識があつて会話をひかえる傾向にある。外国人のなまりの強い英語も英米人には分りにくいらしいのだが、見ていると彼等は手振りを混えてよく喋る。一番の問題は英語を話す速度にある。自分でも余り伝達し

たいことの二割程を云わずに呑み込んでしまうこともしばしばである。何事も心が知れるまでがお互いに我慢の時期でその段階を過ぎると相手方にもこちらのことを察するだけの余裕が出来、当方もさほど遠慮せずに納得のいくまでこちらの話をきいてくれるように頼めるようになる。しかし、大事な事柄の伝達は誤解の起きないように注意が必要なので、苦労をして話を伝えたあと確認のため相手方に復唱を頼んで、その余りの簡略な表現に自分の語学力が情けなくなることを再三ある。私の持論は、批判を避け相手が外国人であつて習慣が異なるうとも互いに相手を尊重するというルールを忘れてなければ道は必ず通ずるというものがある。笑顔は事を更に易くするのに役立つと思う。もとより英語を話せないことが、個人の人格や教養に関するなどと夢、外国人に思わせないとである。施設を訪問する時に日本語の挨拶を用意する外国人を私は大変好ましいと思う。機会あるごとに外国人にも美しい日本語の使い方を知ってもらい、謙譲語は難しいとしても、相手を敬う表現とそうでないものとの違いを理解してもらいたいと望んでい手間どると、云い。日本語は現在ずい分乱れて使用されていて、日本語を学んでいる外国学生を困惑させていると

きくが、私達日本人の心せねばならないことと思つている。たとえ短期間であつても、私達は会を通じて人間同志、楽しいにつけ苦しいにつけ忘れ難い「出会い」を持ちそれを大切にするようにしたい。

私は一五年の間七年を各種委員としての会の活動に携わつてきた。六人の各々に魅力あふれた思いやりのある会長と活動を共にしたが、皆立派な会長であつて思ひ出は尽きない。自分のやつてきた仕事としては、日本の風俗習慣を紹介したり、新入会員の世話をするのが向いていたと思うが、クリスマスバザー委員長を勤めたのも大変素晴らしい経験であつたと思う。

組織活動に比較的慣れている欧米人が先に立つて計画をたてて活動するとやりやすいことが多い。しかし日本の実状に即して説明、助言を与えて常に計画を支え、仕事に参加する日本人会員なくしては成功はあり得ない。双方ともその事を忘れずにバランスよく絶ゆまぬ活動を続けることに会の意義があると思う。

また、家族に迷惑をかけてまで活動に熱中することはない。しかしこの会は活動する会であつて、会員は時間を、労力を、少額のお金を出し合つて目的達成に協力することが望まれている。

奉仕は見返りを望まない行動であるから、私達の活動は一部には暇とお金のあ

る恵まれた人達が社交の合間にやることだと思われている。しかし実際には例会における服装も簡略で経費もかからず、会員は各々多忙である。時間とお金を無駄遣いせずに活用する。無論個人でも奉仕活動は出来るが、大勢の力が集まればそれだけ大きな活動と援助が出来ることは明らかである。国際間には経済摩擦などの緊張と争いの種は尽きないが、せめて私達の周囲だけでも弱者を思いやる共通の目的を持つて国際的に心と話の通じる仲間を作りたい。会を通じて知り合った同志が西や東に帰国後もつき合つていくのを見聞するたびに、会の国際交流面での広がりに思い至る。

短い滞在の貴重な時間を使って地域の為に熱心に働く外国人会員には頭が下る。外国に住む日本人も同様に活躍して欲しい。これから更に多くの人に地域社会の構成員という意識を持つて真の国際交流を目指して欲しい。地域に、貧しく病み身体が不自由で家がなく、愛を求めている人達が居る限り、その人達を励まし、援助して将来に希望が持てるように私達の会は微力ながら力を尽す所存である。私達の活動を応援して下さいる国内の協力者に感謝する次第である。

(この文章は、私個人の見解であり、横浜国際婦人会を代表するものではないことを申し添えます)

なお、当会への文書等は、事務局がないので、港郵便局私書箱一七外

国際便係五一六 Yokohama Int'l Women's Club にてきれば英文で、

会長あてにお願いします。

△主婦▽

⑤ 市民運動としての難民救援活動

本橋 栄

一 国際問題への接点として

国際化時代の今日、もはや私達の暮らしては国際関係なしには成り立たない。身の回りのものは、衣食住・日用品のどれをとってもその大半が海外から輸入された原材料・エネルギーでできている。海外へ気軽に旅行に出かける人も多くなった。とはいえ、日常生活の中では国際問題はなかなか見えにくい。情報は氾濫しており、アフリカの飢饉にしても、生々しい映像が庶民の茶の間まで入りこんでいる。それでも海外の問題に出会うため

の接点はとも限られている。

様々な出会いがあるなかで、「難民問題」は衝撃をもって多くの人々をとらえる。戦争・抑圧・飢饉など原因は様々だが、圧倒的な人災・天災によって最も打撃を受けるのは一般市民、特に女性と子供たちである。このことが人々の心を動かし、なんとか彼らの力になりたいという願いが、たくさん募金や様々な救援活動として表わされる。

難民の流出は、緊急事態として起こる。しかしそれは例えば地震のような突発的な災害と違って、そこにいたるまで

の原因の積み重ねがあつて始めて表に出てくるのである。ぎりぎりの状態に追い詰められて、人々は住み慣れた土地を離れざるをえなくなるのだ。

食糧を送ったり、医療団を派遣したりするいわゆる緊急救援活動の必要性は言うまでもなく高く、大きな働きをする。

しかし、それは重体となつてしまった患者にいわば応急処置を施すようなものでしかない。患者の体力の回復を促し病気の原因を根絶させるにはもつと違った取組みが必要だ。緊急救援活動の限界とむなしさを「バンド・エイド」

二 国際問題への接点として なぜNGOか

にひっかけて「バンドウコウを貼る」ようなものだと言う人もいる。

その「病」の原因をつきつめていくと、それがどうも「彼ら」の問題としてかたづけられるのではなく、日本人である「私達の生活」と結びついており、問題の根がとても深いこと、そして、それは一時的に何億円のお金を積んだとしても解決できるものではないということも分ってくる。^①

ところで難民とはどういう人々だろうか。一般に、戦争、迫害、飢饉などのために住んでいた国を逃れ、国際的な保護